
最近の子供ときたら

HEERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最近の子供ときたら

【Nコード】

N0468N

【作者名】

HERO

【あらすじ】

最近の子供は祐子が思っているような甘いものではなかった。教師になるという祐子の夢は小さな悪魔達に絶たれてしまうのだろうか…！？

小学校の教師を目指している子供好きの大学生 祐子は、温かい陽射しを浴びながら気持ち良く公園を散歩していた。

> i 1 0 2 7 1 — 2 1 0 <

彼女は元気良く遊んでる子供達を眺めるのが好きだった。

「うわ〜ん！ 殺しちゃったよ〜!!」

祐子はその声にドキツとした。首を廻らせ、声の主がブランコに座っている少年であることを確認する。

「ど、どうしたの!? 何を殺しちゃったの!?」

祐子は少年に駆け寄り、そう問い掛けた。

「ミュウツーを殺しちゃったよ〜！ セーブしたのが洞窟の外だから、これからが大変だよ〜！」

祐子は呆れ返った。もちろん、今時ポケモンのグリーンverを初代のゲームボーイでプレイしていることに対してではなく、レポートをミュウツーの目の前でしなかったことに対してでもない。こんなにもいい天気なのに外でゲームをしている、そのことに対して呆れているのである。

「ゲームなんかしてないで、お姉さんと運動しよ」

「うん、いいよ」

祐子はゲームをしていた少年を連れ出した。

あと二人くらいいた方がいいな。

そう思いながら歩いている祐子達の耳に、

「うわ〜ん！ 落ちちゃったよ〜!!」

と嘆く声が飛び込んできた。

二人は何事かと、声のした方へ駆け出した。

「どうしたの？ アイスか何か落としちゃった？」

ベンチに座って頭を抱えている少年に祐子は問い掛けた。

「面白い！ 株価が大暴落したんだい！」

よく見たら少年の膝にはノートパソコンが乗っていた。祐子は一生泣いてると思った。

「子供が株なんてやるもんじゃないわ。お姉さんともっと楽しいことしましょ」

「分かったよ……」

祐子は株をしていた少年を連れ出した。

あと一人、誰かいないかしら？

思いながら辺りを伺う祐子。その時、百メートル程先の噴水の辺りから、

「何でだよ！ 何で来てくれないんだよ！」

と叫ぶ少年の声が聞こえてきた。ただ事ではなさそうだ。

祐子達はすぐに噴水へと移動した。

「どうしたのキミ！？ 誰か大切な人と待ち合わせでもしてるの！？ 生き別れのお母さんとか！」

噴水の前で奇妙な動きをしながら憤慨している少年に、祐子はそう尋ねた。

「んなこと現実でそうそうあるもんじゃねえだろ！ UFOを呼んでたんだよ！！」

「いや、私の方が現実的だよね！？」

まあ、夢があつていいけど。

「いつも一人でUFOを呼んでるの？」

「まあね」

「たまにはみんなで遊んでみない？ 楽しいよ」

「ん〜、いいけど」

祐子はUFOを呼んでいた少年を連れ出した。

「さ、何して遊ぶ？ 鬼ごっこ？ かくれんぼ？」

大好きな子供達と遊べる。祐子の心は踊っていた。

だが少年達の意外な言葉に彼女の笑顔は消え失せてしまう。

「は？ 何言ってるの？」

「大人の遊びを教えてくれるんじゃないの？」

「鬼ごっこなんてやってる奴、今時いねーんだよ！ さっさと犯らせるアマアア！！」

そんな馬鹿な、という言葉が祐子の頭で反響した。

確かに出会った時の彼らは祐子が思う理想の子供とは違っていても誘いに応じた時の顔は、彼女の目には純心無垢な天使のように映っていたのだ。

ということはこれが、この醜さが、今の子供達の自然な姿なのだろうか。

突然、祐子の後頭部を衝撃が襲った。少年の一人が背後に回り、初代ゲームボーイ　これがなかなか分厚い　で彼女を殴り付けたのだ。

倒れ伏した祐子は少年達に引きずられ、公園の真横に広がる森へと連れ込まれた。

祐子の脳裏には「ああもう教師になんてなりたくないなあ」という考えが浮かんだが、少年達にやりたい放題されているうちに頭が真っ白となり、ネガティブな思考すら停止してしまった。

どれだけの時間が流れただろうか。

少年達は三人共家に帰り、ポロポロになった祐子だけが森に取り残された。

こんな状態になってしまったというのに、祐子の教師に対する想いは消えていなかった。それどころか前よりも強くなっていた。

祐子は少年達に弄ばれた記憶をオカズに自慰を始めた。

「ハア…ハア…やっぱり子供、いいかも…」
祐子の教師に対する憧れは、よこしまなものへと変わっていた。
> ii10273 | 210 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0468n/>

最近の子供ときたら

2011年10月3日19時57分発行